

一、流麗なる御狐様の参列

私は、視える子だった。

所謂お化けと云うものが。薄つすらとぼんやりと。けれどはつきりと。

例えば、誰かの気配がするとか素早く後ろを振り返ったら誰かの影が見えたとかそう云ったものじゃない。私が視えたのは——お稲荷さんとか氏神様とか、そう云ったものだったのだ。

狐が神様とか、石が神様とか、トイレにだって神様は居る。日本は面白い国だ。どんなものだって神様にしちゃう日本人が私はちよつと好きだったりする。この前テレビで宗教戦争をしている地域の人が「一体どうすれば私たちは幸せになるのでしょうか」「みたいなことを云っていたけれども、私たち日本人からしてみれば「一旦、神様を信じないってのはどうでしょう」って感じだと思う。

日本の多神教ぶりがどれほどかと言えば、神道と仏教と、其れに儒教とか道教とかの思想が全部一緒くたになつてゐるってことでも解る。日本人の生活の考え方は全部それらがごちゃごちゃになつて根底にあるのだ。

まあそれはいいか。

兎に角私は視える子で、そして矢張りそう云う子たち一般と同じように、だんだんそれが視えては不可ないものだと言ふ事に氣付き始めた。勿論、氣付く前までは「あそこのお

狐さんは何をしているの？」だとか「いまあそこにいるおばあちゃんと鬼ごっこしてたんだよ！」とか云つていたけれど、それを聞いた皆は疑問符を頭の上に浮かべていた。

私にとって幸運だったのは私の視えるものを親や祖父母が否定しなかったことだ。両親も祖父母も視ることはなかったけれども信じるような人だったのだ。だから私としては良かった。

今から回想するのは、私が彼らの事が視えなくなった夏休みの思い出。

今となつては、本当にあの日があつたのかと思うけれど、でもきつと、あつたのだと思う。私の大切な思い出だ。



わたしは小学六年生の夏休み、おばあちゃんとおじいちゃんの家泊りに来ていた。夏休みのか月半、わたしは二人のお家で過ごすのだ。おばあちゃんとおじいちゃんのお家は昔は農家で、今は一応畑をやっているが特に何処かへ出荷したりとかはもうしていない。詰まり道楽で畑仕事をしているのだ。不思議かもしれないけれどもそんなもので、健康な体を持つ二人の老後の楽しみとしては悪くないものだった。

だから結構広大な土地を、二人は畑として使っていた。

わたしは今、縁側でアイスを舐めている。

此処が母屋で、私が居る縁側の背後におじいちゃんやんの書斎がある。書斎から北側にリヴィングがあつて更に北にキッチンがある。キッチンからは裏庭に繋がつて居て、なんて云うんだらう。洗濯機とか水洗い場とかがある。キッチンの西側にお風呂が在つて、お風呂とリヴィングも繋がつている。リヴィングの西にわたしとおばあちゃんとおじいちゃんが寝る場所——詰まり寝室がある。リヴィングからは長い廊下が生えていて、その先にはトイレがある。

リヴィングから廊下に出てすぐ南には玄関がある。つまり玄関はおじいちゃんやんの書斎の西。玄関の西に畳の部屋があつて、お客さんをお通しする場所になつている。更に西には仏間がある。ちなみに畳の部屋とリヴィングには神棚がある。神棚には神様がいつもいる、らしい。で、仏間から廊下を隔てて北側には四畳半と呼ばれる物置があつて、詰まり四畳半の広さだ。いつも暗くて怖い。此処にもいつも神様が居る。氏神様だ。

詰まり何が云いたいかつて云うと、この家は広いのだ。

この広い家と同じくらいの大きさの庭がわたしの目の前に広がつている。更にこの母屋の半分くらいの大きさの木小屋がある。木小屋にもちよつとした部屋がある。一番西が部屋になつて居て、昔はお父さんが其処に住んでたり、職人さんが住んでたりしていたみたいだけど、今は居ない。母屋の西側にはやつぱり小屋が在つて——いや、倉庫かな——其処にはトラクターとか除草機とか、そう云つた大きな機械が眠つていた。彼等もまた、生

きているしここにも神様がいます。やっぱり氏神様が。

で。木小屋から公道を隔てて更に南には畑がある。畑は『前の畑』と呼ばれている。何であつて云うと、裏にも畑があるからだ。裏庭の北には竹藪があつて、竹藪から北に、やっぱり公道を挟んで『裏の畑』がある。裏の畑の西には別のおうちの畑が在つて、そこは菜の花畑だ。黄色が一斉に咲いて凄く綺麗。

わたしはアイスを舂めながら庭を見ていた。おじいちゃんが好きなようにしているから結構雑多な庭。わたしの目の前には凄く立派な松が在つて、松は凄く優しい。松ぼっくりを付けないから多分男の人だと思う。いつかお話出来たらいいなつて思っている。松の下には水仙が沢山咲いている。水仙でも色々な種類が生えてて綺麗。わたしは水仙つてだけしか知らないから水仙は全部水仙だ。

「コウ、それ旨い？」

「あげないよ」

わたしの隣で一緒にお庭を見ているのは狐のコンだ。氏神様に成れなかつたと云うか成る積もりがなかつた狐で、色は結構綺麗な黄色。狐色つてやつだ。尻尾の数が二つつてことから解るけれど、やっぱり他の人には見えない。見えない割には凄くよくはつきり視えるから困る。

そう云えば、瞳の色が白いから普通の狐ではないのが解るか。いや、二尾つてことで解るのか。

まあ、如何でもいいや。わたしとしては畑にお仕事に行ってるおじいちゃんとおばあちゃんとの代わりにわたしの相手をしてくれるコンはありがたい。
ちなみに。

コンって云うのは彼の名前じゃない、勿論。彼には名前が無いからわたしが付けたのだ。狐と云ったらコン。狸だったらポン。小学生の発想なんてそんなものだ。

「解つてらいつ。きつねはお揚げしか食わないのっ」

「うそつき」

「……まあ、何でも食うけど。好きなのはお揚げだぜ」

わたしは視線を庭の松にしたまんま、アイスを舐めながらコンと会話をしていた。

「裏のお稲荷さんから貰ってるの？」

わたしはコンに尋ねた。

家の裏庭にはお稲荷さんの社があつて、其処には二匹……二人？——じゃないか。神様だから二柱だ——のお稲荷さんがいる。お稲荷さんは真つ白で赤い模様が入っている。そのお稲荷さんには何日かに一回、ともするとおじいちゃんの気が向いた時とかお盆とかお正月とかのお目出度い日にお揚げをお供える。

「……貰つたり……」

コンはそうやって肯定した。

融けるアイスを必至になつて口の中に押し込んで、私はアイスの棒を口の中で弄びなが

ら、コンを見た。コンは人間の様にちよこんと縁側に腰かけているので前足が手のように見える。胴が短くてころつとしていている体型なので何だか余り違和感がない。

「むー。暑いよーう」

わたしは余りの暑さにコンの言葉の後にそう云った。そう云わずとも解ってるけど。
「暑いな」

コンも応じる。

コンはわたしより余計に暑いだろうなと思う。だつて毛皮着てるし。

そう云うと、「毛皮じゃねえよ」と悪態を付かれた。思うに、コンは神様っぽくないから神様に成れないんだと思う。日本は誰だつて神様になれる国なのに。人間だつて神様になれるんだよ。

「うっさいよ、お前さーおれたちの苦勞も知らないで」

「なに、苦勞つて」

「あ？ カミサマつてのは結構辛いんだぜー」

「だから、何が？」

「色々、だよ」

「コン、神様じゃないのに知ってるの？」

「……知り合いにはカミサマだつて居るぜっ」

何が辛いのかは知らないと見た。全くはつたりも良い所だけでも、それがコンの良い

所だ。うん、可愛い。私よりも何百年も多く生きてるけど。

「コンは何百年も生きててさ、どう？ 詰まらなくなったりする？」

「ん？ あー。そうだなー。結構お前みたいなヤツついでさ、まあ、視えるんだな。大体大人に否定されて視えなくなるか無視するようになるかなんだけど、たまーにお前みたいな変なやつつか恵まれてるやつがいるんだ。そんなのと一生付き合ったりすると結構其れなりだぜ」

「ふうん」

でもわたしは何と無く、一生コンと喋っては居られないと思つていた。多分わたしも視えなくなつちゃう時がくると思う。

「くああーあ」コンは大きな欠伸をして後ろに倒れた。無防備も良い所だ。「暑くて眠れもしねー」

「そーだねー。ご飯もあんまり食べたくないよね」

お昼はソーメンだったからちゃんと食べられたものの、固形物はちよつときつい。

まあ、食べるけど。わたしはそれなりにちゃんと元気で健康なのだ。

わたしは縁側に寝っ転がっているコンを後目に、縁側から飛び降りた。目の前には大きくて立派な松。松の下には水仙。水仙の下には雑草。雑草の下には。

「ん？ コウ、何処に行くんだ？」

「探検」

わたしはそれだけ云うと松の下に視線を這わせた。

雑草はジャングルだ。雑草の中には色々な蟲がいる。例えば、シヨウリヨウバッタ。チスイバッタも居るし運が良ければカミキリだつて見つかる。

でもわたしの最近のお気に入りにはアリだ。アリの中でもクロオオアリが気に入っている。クロオオアリは兎に角でかい。それがいい。捕まえると指を噛んで逃げる。痛い。その勇ましさも好きだ。何よりその形状が、黒さが、好きだった。

わたしはアリを見付けて追つた。そうするとやがて巣を見つける。わらわらと出てくるアリたちをわたしは見る。何を目的に彼等は存在しているのだろうか、なんて難しいことを小学生が考える訳もない。唯その動きが面白かったのだ。

「な、面白い？」

二十分ばかりアリの巣の入口を見ていると、コンがそう云つた。

「ん？ いや、何となく」

わたしは応えた。面白いと云えば面白いけれども。

わたしは顔を上げて寝つ転がるコンを見た。コンだつて二十分もそんな格好で詰まらないのかと思うけど、人のことを云える立場じゃないか。

「むー」

私は二十分も屈んでいた訳だから、ちよつと足が痺れている。痺れた足を伸ばそうと立ち上がり、ついでに伸びをした。すると丁度その時、木小屋の東から誰か知らない人が来

てわたしを見て微笑む。

「あら、コウちゃん、おばあちゃんとおじいちゃんは居る？」

「あ、えーと、探して来ます」

吃驚した。たぶん知ってる人なんだろうけれど憶えがない。憶えようとしないからだろうけど、多分憶えても意味がない。わたしはそれだけ応えて裏の畑へと赴いた。

木小屋の東から砂利道に出て、裏の畑へ行く。結構走る。庭の横——庭と砂利道は塗炭の壁で隔てられている——を走って、竹藪の隣を走って、そして公道に出る。公道からは裏の畑が一望できるのだけれども、其処には居なかつた。だからわたしは戻って竹藪と裏庭の間の小さな——ともすると子供くらいしか通れないような——道を通って裏庭に出た。裏庭にも、居ない気がする。

その時ふと、視界の端に白いものが視えた。

「あ、お稲荷さん」

吊り眼で白くつて、ちよつと大きい。私の背の高さ位あるお稲荷さんは、眼の周りに朱で格好いい模様が描かれている。

——如何した。

一人が云つた。

「おばあちゃんかおじいちゃん、知らない？」

——貴殿の祖父母らは暫く此処には来て居らなんだ。

もう一人がそう云うので、私は「有難う」と云つて裏から家の中に入った。若しかしたら裏から入つて家の中に居るのかも知れない。

「おぼーちゃん」「おじーちゃん」

と云いながら、わたしは家の中を徘徊するが、矢張り居ない。四畳半に足を踏み入れると、幽霊——氏神様が座つて裁縫をしていた。

「おぼあちゃん知つてる？」

——否。厠は外にもあるしなあ。暫く来なんだ。

「有難う」

この幽霊は私の遠い親戚のようだ。なんとなく解る。

私はもう一度裏の畑に行こうとするけれども、その前にお客さんを待たせ過ぎるのも不可ないと思つて、一度庭に出てから、待たせているお客さんに「見付からないのでもうちよつと待つて下さい」と云おうと顔を出した。

すると。

「あれ、コウちゃん、ドコ行つてたんだい」

おぼあちゃんが其処に居た。なんだ、と思つて私は裏庭に引つ込んだ。

あんまり知らない人と一緒に居るのは好きじゃない。なんか、嫌だ。

嫌なんじゃないんだけど、なんて云うのだろう。気を使うと云うのだろうか。自分を偽らなければならぬ誰かの前と云うのは、至極気持ちが悪かつた。

私は裏庭に行つて先刻会つたお稲荷さんの所へ向かつた。家からは、ぱたぱたきしきしと云うお茶を運ぶおばあちゃんの足音が聞こえる。古い家だから軋むのだ。

「おばあちゃん見つかつたよ」

——其れは善かつたな。

——嗚呼、善かつた。

二人はそう云うが、二人の感情は解らない。コンなら一発で解るような雰囲気なのだ。が、彼等二人は表情が解らないし感情も解らない。

「おふたりは、お名前無いですか？」

なんとなく畏まつて云つてみた。するとお稲荷さんは「そんなに畏まるな」と笑つた。

——我等に名はない。

——我等に名は必要がない。

でも二人は似ているから呼ぶ時困る。

そう云うと、

——ならば主が付けると善い。

——名とは記号。

——但し言霊。慎重に付けよ。

む、とわたしは唸つた。コンには適当にコンと名付けたけれども、二人はれつきとした神様だ。安易な名前を付ける訳にはいかないと云う事か。

「むー」

——ほほ、其方が無理を云うから悩んで居る。

——言霊は怖いぞ。

一人が笑い、一人がむくれた。如何やら全く同じ格好をしている二人にも個性はあるようだ。

「むうー。今、無理。格好いいの思い浮かばない。後で辞書で調べてくる！」

——然様か。愉しみにして居るぞ。

——オオ、愉しみじゃ。

嬉しいような嬉しくないような。特に左側——のお稲荷さんはちよつと悪意がある気がする。でも神様だし、見た眼も可愛いし格好いいから嫌な感じはしない。

わたしはそのままの足で裏から上がって辞書を探した。辞書なんてあんまり使わないから何処にあるのかも見当が付かない。わたしが思う所、おじいちゃんの書齋にあるかもしれない。書齋って云つてもおじいちゃんが日記を書いたりする場所であんまり本はない。在るとしたらおじいちゃんの文机の抽斗の中だけだ。

うーん。無いなあ。

探していると隣の玄関からおばあちゃんときっきのお客さんの話声と笑い声が聞こえる。おばあちゃんのお友達だったのか、と私は思う。この母屋の玄関は、たぶん普通の人が想像するのとはちよつと違うと思う。いや、どこでもそんな感じなのかも知れないけ

ど、玄関が在つてそこにもちよつとした空間がある。何て云つたらいいんだろう。解らないけど。

ちよつと遊びに来た人とかお友達とかは玄関に腰かけてちよつとお話して帰ると云う事が多い。

わたしはやっぱり会いたくなかつたので、一旦リビングに出てリビングからそつと廊下を伝つて四畳半に行った。

——何じゃえ？

氏神様がいます。今度は洗濯物——ではないか。着物を畳んでいた。四畳半の氏神様はこの家のことを何でも知っているので、探し物とか失せ物とかがある場合は良く聞く。そして何故か知っている。

「あのね、辞書つて家にある？」

——辞書、とな。

むうー。と考えている氏神様は何かわたしと仕種が似ている気がする。やっぱりわたしのご先祖様だと思ふけれど、ご先祖様つて仏様じゃなかつたっけ。

——木小屋の小木屋にあるのではなからうか。

そう云えば木小屋の小屋には沢山本があつた。読まなくなつたわたしの絵本とかも、そう云えば木小屋に収納されている。

「そつか。有難う」

わたしが笑みを浮かべると、氏神様もやんわりと笑いを浮かべた。

わたしは氏神様にお礼を云つて廊下に出る。流石に庭に出るには玄関に行かなきゃならない。玄関にはお客さんが居る。凄く行きにくいけど、今は辞書が欲しいのだから仕方がない。

わたしは結構な勇気を振り絞つて玄関へ行つた。

「こんにちは……」

さつき会つたけど、何も云わないで顔を合わせるのも凄く気拙い。だから何となく云つただけど、云つてから何か変だと思つた。けれど撤回することは勿論できない。

「嗚呼」

向こうも何て云つたらいいのか解らないのだろう、会話を一旦止めて二人は私を見る。

「コウちゃんもおつきくなつたよねえ。何年生だい？」

「あ、えーと、六年生です」

「そうかいそうかい」

其処で会話が途切れると思つたのだろう、すかさずおばあちゃんがわたしに問う。

「何処へ行くんだい？」

勿論私が玄関に顔を出した理由は何処かへ行くからに決まつている。だからおばあちゃんは問うのだ。本当におばあちゃんは気がきく凄く凄く優しい人だ。

「んと、木小屋のお部屋に」

「そうかい」

それ以上聞かないつて云うのも凄くおばあちゃんらしい。其処が好きだ。

おばあちゃんはわたしの事をよく解つて居て呉れる。吃驚するくらいに。わたしはおばあちゃんの背後の方から玄関に降りてサンダルを履く。一応お客さんにお辞儀をしてから庭に出た。

庭は相変わらず緑が蔓延していて暑い空気が蔓延つてゐる。ふ、と視線を感じて左を見ると、松が佇んでいる。松を見て思い出したけれど、そう云えばコンは一体何処へ行ったのだろう。お客さんが来た瞬間に何処かへ行つて仕舞つた。行つて仕舞つたのか、それとも視えなくなつて仕舞つたのかは解らない。

わたしはそのまま緑の中を歩いて木小屋の西側にある部屋の中に入つて行つた。

窓にカーテンが敷かれてゐるので昼間でも薄暗い。誰か人の気配がするようで恐いのだけれども、恐る恐る入つて行く。そして電気を付ける。

電気を付けると部屋の全体像が見渡せる。部屋は本当に人が一人住めるような其れだけの部屋で、おじいちゃんの書齋みたいな感じ。でも四方——と云うか三方は天井までの本棚に覆われていて、少し埃っぽい。わたしの背の高さの三分の二位の大きさの、おつきな縫い包みが本棚の前に鎮座してゐる。ペンギンのとロボのそれはやつぱり埃の匂いがする。

わたしは本棚を見上げて辞書を探した。あんまり難しいのだと読めないのだけれども。

本棚を適當に物色すると、案外簡単に見つけることが出来た。辞書は難しい言葉ばかりあるけれども漢字の下に平仮名が書いてあつたりするので読める。

兎に角、狐つて文字が入つたものだよな、と思つて私はペラペラと辞書を捲る。案外後ろの方には面白いものが載つてたり、辞書によつて附録が違つたりするので面白いよし。

結構な時間辞書とにらめっこして、二人の名前が決まつた。時間を忘れていたが、どうやらお客さんも帰つたようだ。わたしは部屋の電気を消して庭に出た。

時間が丁度三時らしく、玄関の方を見るとおじいちゃんの姿も見えた。お茶の時間みだいだ。わたしは玄関に駆け寄る。お茶の時間と云う事はお菓子もお茶もあるのだ。

案の定、さつきまで——時間を忘れていたから何とも云えないけど、どうやらわたしは小一時間あの部屋に居たようだ——お客さんが居た場所にはおじいちゃんが座つて居て、畑仕事で疲れた体をお茶と甘いお菓子で癒していた。

「応、コウ。こつちおいで」

「はい！」

わたしは満面の笑みでおじいちゃんの元へ走り寄る。呼ばれなくても行く。

わたしはわたしの特等席、おじいちゃんの膝の上に乗つてお菓子に手を伸ばした。お菓子を挟んで反対側にはおばあちゃんがにこにこ笑つて居る。おばあちゃんはわたしの為にお茶を入れて寄越して呉れた。

「コウ、学校の宿題は出てるんか？」

おじいちゃんが問う。

「うん。んーとね、日記とー、算数と国語と理科と社会のワークと、自由研究と、読書感想文」

「其処が涼しいから其処でやるといいよ」

おばあちゃんはお客さんを通す、仏間の隣の部屋を云った。

おばあちゃんとおじいちゃんの家にはクーラーがリヴィングと寝室にしかない。一人だけでクーラーの恩恵に与る訳にはいかなないのでやっぱりわたしは暑い中を選ぶ。

「わかったー」

するとおばあちゃんは何かを思い出したように云う。

「そうだ、さつき畑仕事をしてたら珍しい芋虫が居たから捕まえていたよ」

「ホント！ どこどこ？」

「その蟲籠に入れてあるよ」

わたしはおじいちゃんの膝の上からぴよんと降りて、おばあちゃんが云った蟲籠を探す。

蟲籠はさつきまでわたしがコンと話していた縁側に在った。

珍しい、なんだろう？ 大きさは七センチくらい。この芋虫が居た場所の葉っぱをおばあちゃんは一緒にとつてきてくれているので食物の心配はない。足りなくなったら取って

くればいい。

色は茶色で、お尻の方にも顔と同じような模様がある。そして角も。一般的な擬態だ。私はその幼虫を暫く見ていた。

「今度は芋虫の観察かよー」

「ん？」

いつの間にかコンが松の隣に立っていた。

コンはいつも二足で立っている。基本的に二足歩行だが、走る時は流石に四足だ。

「あれ、居たの？」

「ひでー。お前さ、他のことに気を取られるとおれが見えなくなる癖やめてくれない？」

「さみしーじゃん」

本人的には猛然と抗議をしている積もりのようだ。然し小さい狐が二本脚で立って、腕を組んでいるのだから滑稽でしかない。

「だつてしょうがないじゃん。見えなくなっちゃうんだもん」

わたしは視線と注意を芋虫からコンに移した。はつきりと視える。

確かにわたしは別のことに気を取られると彼等視えてはいけないものが見えなくなる。それは良いが、矢張り彼等からしてみれば突如無視されたと言う事になるのだから。

そう思つて、即座に前言を撤回し、謝る。

「ごめん」

「ま、いーけどさ」

そう云つてコンは縁側に座つた。

コンが視えると云う事は、矢張りいつの間にかおじいちゃんとおばあちゃんは畑に戻つたのだ。氣付かなかつた。

「そー云えばね、裏のお稲荷さんに名前を付けてつて云われたから考えて、それをこれからお知らせに行くんだけど、一緒に行く？」

まだ芋虫を見たい氣もするが、コンは芋虫の行動に然程興味がないようだ。だから私はそつちに誘つた。狐同士ならば仲良く出来るだろう。

「ん？ え、あの二人に？」

「うん」

「何の氣の迷いだ……」と、コンは暫し考えて「いや、此処で待つてる」と云つた。

種族が違うのか、良く考えたらコンの尻尾の数は二つで、裏のお稲荷様の尻尾の数は三つだ。何かがあるのだろう。階級とか。普通に考えたらやっぱり本当の神様である二人の方が偉そう。

「ん。じゃあ行つてくるね」

私はコンに云つて、縁側から地面に降り立ち、母屋と倉庫の間を通り抜けてお稲荷さんの元へ行つた。

——ほおう。早いな。

——ドレ、愉しみだ。

「うん。うんとね」私は注意深く云った。どちらがどちらか見た眼だけじゃ解らない。口の悪い方が——なんて云うのも失礼だし。でもそれ以前に、雰囲気が違う。

声には出さないまでも、私は「口の悪い方が」と心の中で呟きながら、左の御狐さんに云う。

「んと、貴方が疑狐ぎこで」続けて右側に「貴方が解狐かいこ」

そう云うと、解狐かいこが笑う。

——ほおう。中々に主、解つて居る。

——否否、待てよ。我が疑狐ぎこじゃと？

——何を云う。ぴつたりすぎてこの仔の言霊使いは巧いと確信に至るぞ。

——然しにして主の解狐とは云い過ぎではないか。解する狐とは。

——主が疑し、我が解す。善いではないか。

正直漢字の意味を頑張つて探して付けたので、其れなりに満足して貰えて良かった。疑狐もなんだかんだと云いつつ、嫌がつては居ないようだ。

——よし、貴殿。名を付けて呉れた礼に明日、狐の参列に連れて行ってやろう！

そう云つたのも疑狐ぎこだったので、やっぱり其れなりに、若しかしたら結構、気に入って呉れたのかも知れない。

——疑狐よ、あれに此の仔を連れてゆくのか。

——善いだろう。オイ、コウ。

「はいっ？」

何でわたしの名前を知っているのだろう、と思ったけれども、わたしよりこの家に長くいるのだから知って居て当然と云えば当然なのかも知れない。

——家に狐の面はあるか？

疑狐が問うので、私は思い浮かべる。面——お面、か。

「玄関にひよつとことおかめのお面はあったよ」

——クハハ、それじゃあ駄目に決まって居ろう。

——面は貴殿が狐に化ける為のもの。

今度は解狐が云う。どうだろう、どこかにないかな。

「解んない。探してみる。多分あると思う」

二人が所望するのならばきつと何処かにあるのだろう。わたしよりもこの家と土地のことをよく知っているのだから。

——そうか。明日、八月一日の夜に此処に来い。主の祖父母には内緒だぞ。

内緒！　なんて良い響きなんだろう。何だかワクワクしてきちゃった！

わたしの表情が明るくなったのを見て、二人も満足そうに笑った。特に疑狐が。案外良い神様なのかも知れない。神様に良いも悪いも無いと思うけど。

——よし、ではまた会おうぞ。

疑狐がそう云うと、二人は社の中に入って行った。すうつと吸い込まれるように。その途端わたしにも視えなくなつた。

「楽しみにしてゐるね！」

そう云い残してわたしはにこにこ笑顔で庭に戻って行った。